野田宇太郎 文学散歩 第22巻

野田宇太郎文学散歩

第22巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』、つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他,全詩集『夜の蜩』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下杢太郎研究『きしのあかしや』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　22
九州文学散歩　上

昭和53年11月5日　　初版第1刷発行

著　者　　野田宇太郎
発行者　　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　　振替東京2-42149

©1978　0395-90122-7354　　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

有田
「呉須のにほひ」　赤絵の町　柿右衛門と有明　九
伊万里
渭水のほとり　青螺山麓　二
平戸
おらんだ遺跡　じゃがたらぶみ　下島翁　二七
佐世保
せりうり　三七
長崎
なおも祈れり　紫陽花と菊と　小雪降る日　四三
雲仙
大叫喚　赤彦はいづくゆくらむ　五三
島原
水に朱欒の映る町　日暮城　ロノ津の宿　五九
天草
天草雅歌　鬼理志丹町　蜜の少女　大江の宿　ガルニエ神父と茂助　七〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

熊本　八九
ヘルンの面影　漱石の引越し　水前寺にて　阿蘇の山里
鹿児島　一〇三
城山からの展望　墓地の印象　桜島
日向　一一
牧水の故郷　みなかみの歌　城山の鐘
佐伯　一三〇
獨歩と龍溪　三銭五厘の皿　源おち後日譚
別府　一三八
『西の旅』　白昼夢　由布岳の麓
中津　一三六
独立自尊の窓
耶馬渓　一三九
青の洞門　禪海の槌
小倉　一四四
常磐橋　「鶏」と「独身」　安国寺と福聚寺
若松　一五三

洞海湾　高塔山

松浦潟

はためき　唐津　荒城彷徨　一三七

佐賀

いでゆの歌　鶴鴿の話　佐賀の水鏡　一六五

柳川

かささぎ　六騎　白秋生家　帰去来　一七三

久留米

すみれ蹈み　繁と春江　ケシケシ山　一八七

朝倉

巽軒秘話　帰省　佐田川のほとり　一九七

福岡

筑紫路　記念写真　海　〔補記〕海の中道　二〇七

対馬

津の島　対馬と吉田絃二郎　上見坂峠にて　佐須川のほとり　豆酘まで　竹敷と防人の城　二三三

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で本文と共に無断使用を禁じます。

九州文学散歩　上　　おぼえがき

『九州文学散歩』上中下三巻のうち本書はその上巻である。『九州文学散歩』は何れも西日本新聞に連載したもので、上巻は昭和二十七年十一月末から十二月下旬にかけての調査記録が主となっている。ようやく『新東京文学散歩』正続を刊行したあとの、「文学散歩」としてははじめて東京を離れて地方をまとめて書き出した第一作であり、著者の文学史研究もまだ未熟の部分が多かった頃で、新聞掲載でもあったから原稿枚数にも限度があった。従ってそのあとに中巻下巻と続篇を書くことにもなったのだが、何と云っても日本全土がようやく戦後の再出発をはじめた頃の九州の記録であり、第一印象でもあるだけに著者としてはとくに愛著も深い。本書ではその他に新らしい原稿として福岡に関係ある「海の中道」と、長崎県ではあるが歴史的には福岡市の博多港から玄界灘を渡って行くべき「対馬」（書き下し）を特に追加した。その執筆データーは各篇に書きつけている。なお「対馬」といえば「壱岐」はということになるが、わたくしが壱岐島を訪れたのはこれも歴史を考慮して佐賀県東松浦郡呼子からであったから、あらためて呼子を書いた中巻の最後に収めることにした。なお巻末の資料写真は対馬以外はすべて昭和二十九年十一月から十二月にかけての著者の撮影である。（著者）

九州文学散歩　上

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

有田

「呉須のにほひ」

有田に来た。冬とはいえ、常緑樹の茂る山々が競い立つ肥前の山峡に、静かに横たわる温雅な磁器造りの町である。

わたくしはかねてからこの町をゆっくり訪ねてみたいと思っていた。九州の、異国情趣に裏打ちされた古い歴史を本当に知ろうとすれば、まず大陸文化を早くから吸収した肥前の磁器を作り出す町々を訪ねて、白磁の膚に匂うほのかな呉須（ごす）の色の秘密をさぐらねばならぬと考えたのもその一つの理由であるが、このことを逸早く実現してわが近代文学に清新な象徴体の詩風をうち樹てた蒲原有明に「有田皿山にて*」と題する詩があり、その詩が強くわたくしの心を有田に結びつけていたからである。

真昼時。日は照り盛る
南国の磁器の町なか。
一人ゆく旅の物憂く、
精魂も竭きぬる熱さ。

……という書き出しではじまる四十行ばかりのこの詩は、はじめ明治四十一年（一九〇八）十月号の雑誌「趣味」に「呉須のにほひ」と題されて発表されたが、後に改題されたものであった。

蒲原有明はその年初夏、有田からほど近い蔵宿という村の、夫人君子の実家西山家に夫人と共にしばらく滞在していて、その間伊万里や有田の町に親しんでいた。しかし、この時が肥前生活の始めではない。有明の実名は隼雄で、明治九年（一八七六）三月十五日東京麹町区隼町の生れだが、原籍は父忠蔵の出身地、佐賀県杵島郡須古村で、そこに壮丁検査（明治二十九年）のころの約二年間を過し、親しく接した肥前の風土からその詩魂はしだいに燃え始めたと云ってよい。「ありあけ」のペン・ネームも肥前の渚を洗う有明湾の名からとられているのである。

白玉の磁器の膚に
染み匂ひ、物をやおもふ、——

丹の色の歓楽の夢、
哀愁の呉須の唐草。

……美しいイメージのその詩の一節を思い浮かべながら、わたくしは白壁土蔵造りの、如何にも豊かで落着きのある家のたちならんだ町を歩いた。

なほ行けば通りすがりの
旅人の眼をも奪ふと、
隣り合ふ店棚のうち、
さまざまの器の形、

とうたわれている、そのままの店棚などをのぞきながら。

清く澄んだ小川が不意に町中の道路を横切り、磁器や、磁器を焼く時に使うハマ、トチノミなどの破片が、白々と、水底に貝殻のようにゆらめいている。磁器製の鳥居や燈明台や高麗犬のある陶山神社の丘に立ち、それから上有田駅にほど近い泉山へ向う。泉山は豊臣秀吉朝鮮出兵の時に、肥前佐賀藩主鍋島茂直が伴い帰った李参平という韓人の陶工が、寛永年間に発見したという有田磁器の原鉱を産するところで、いまでは有田の誇る奇勝の地として、公園化していることでも知られている。

わたくしは泉山へ、古い裏町の道を歩きながら、とある家の軒下に、これもまた古い石彫り蛭子がまつられているのを見て、立ちどまった。

蛭子神彫りて立てたる
標石、ただ黙然として、
人気なき衢をば往きつ還りつ、
玄鳥しきりに飛びぬ。

と、ふと有明の詩の最後の一節を思い出したのである。これが有明の詩に書かれた蛭子の石彫りだという証拠はないが、詩の中の蛭子の姿そのままだということはたしかであった。若き日の有明もまた、初夏の日盛りのこの道を泉山の磁鉱採掘場へと一人歩きながら、この蛭子神の上をしきりにとび交うつばめの姿に、そぞろ旅愁をそそられたのではあるまいか。そんなことを空想しながら、わたくしは詩と現実の模糊とした世界をなおも歩きつづける……。

赤絵の町

泉山は全山磁鉱によって出来た山で、嘗て有田の生命の源泉だった所だと云ってよい。だが単なる

磁鉱採掘場では勿論ない。両側の崖に緑したたる切通しを過ぎて、二度三度曲折した山径を奥に進むと、まるで奇怪なアメリカの西部劇映画の一場面にでも迷い込んだような、秘境の名にふさわしい白い広場が忽然として現われた。遙かな白い断崖の下では、罌粟粒のように採鉱夫の姿がうごめき、断崖上への細い径を辿ると、まもなくその小径は暗い窪みの中へ流れ落ちるように降って行った。洞窟がある。二百数十年前に掘られた坑道の一角で、その奥のわずかに外光の先が届いている所に明礬水（みょうばんすい）の湧く神秘的な小さい泉が鎮もっている。かと思うと、そこからまたトンネルが奥の方に続いて、その中を腰をかがめながら行くと、今度はまた急に明るい谷底のような場所に出た。そこから小径はまた四方に分れる。不思議な迷宮とでも形容しようか。歩くほどに磁鉱採掘場に居ることを忘れて奇勝遊覧の思いに捕われはじめた。泉山公園と称されるのも決して不自然ではないと思う。

わたくしはすっかりこの磁鉱採掘場の虜となったが、ようやく我にかえって今しがた辿って来た道をまた元来た方へ戻りはじめた。白い魔術の山から赤絵の町の方へゆくためである。

磁器の町有田の代表的な大店（おおだな）、深川製磁会社に寄る。ここは本通りから少し横丁に入りこんでいて昔の町の中心地らしいが、深川製磁の前に古めかしい異人館造りの家があるのにわたくしは気づいて立ちどまった。早くより伊万里焼の名でいわゆる南蛮貿易をしていた有田の、これは一つの生きた証拠に違いない。異国情調……そんな言葉がふと脳裡をかすめる。これも蒲原有明の文学には忘れることの出来ない問題だと気づく。

人に訊ねると、それは明治九年（一八七六）に田代紋左衛門という磁器商が、外国貿易の見本品陳

列場として建てて西洋人の顧客などを招いた家で、今は田代の子孫が経営する薬種屋の家だということであった。そういえば、深川製磁の店の奥ではさっきからなめらかな英語の話し声が聞えていた。こんな田舎の町に、と思いながら、わたくしは遠い南蛮との交易時代の実景にでも接したような気持になって、聞き耳を立てた。

次に香蘭社経営の古伊万里陳列室を観る。

「丹の色の歓楽の夢、哀愁の呉須の唐草」……有明の詩そのままの、目もくらむ恍惚境のような名器の数々が陳列されている。一枚の呉須染付けの異人館を描いた平皿にわたくしは興味をひかれた。

そのあたりは現在の有田町の本通りで、赤絵町という。赤絵を描く工人の家が軒を連ねて、寛文十二年の頃からその名が起きたと伝えられる。赤絵町の老舗は先ずこの町と共に歴史の古い今泉今右衛門家に指を折らねばならぬ。鍋島公の御用赤絵師として、いわゆる色鍋島の秘伝を伝えたこの家の技術は、今度無形文化財にも指定されたという。次にわたくしは今泉家を訪れた。ここでも家伝の数々の名器に接して、いよいよ有田の魅力に陶然とした。外に出て、表通りから今泉家を振返った時、思わずはっとした。その古びたひさし瓦の、二階の格子窓の下の方に、まるで夕焼けの茜雲(あかねぐも)でも薄く溶かしたような色調がほんのりと流れているのに気付いたのである。まだ黄昏には早い。空をみても夕陽は流れていない……。そこに出てきた今泉家の人に聞くと、あれは代々二階の仕事場から濃手(だみて)といわれる絵付けの職人達が赤絵具の水を捨てつづけたのが、長い間に瓦に沁み込んで、あのような色になったのです、と教えてくれた。わたくしの驚きはたちまち感歎と変った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook